



開廊当初から画廊企画で若手アーティストを紹介する「オン・ザ・ステップス」も五回目を迎えた。当初は複数のアーティストであったが昨年は4人に限定、今回は9人と倍以上になる。アーティストと作品の「数」ではなく「質」を問う展覧会であることが理解できる。

穴澤和紗は1988年千葉生まれ、2015年にステップスで個展を開催、小品を10点出品。九つの小さな画面に描かれているのは花であろうが、人体にも風景にも見える。少し大きな画面の人物にも雰囲気表れている。顔料の物質性を強調しても良かったのではないだろうか。

甲斐千香子は1987年宮崎生まれ、今年の9月にステップスで個展を開催予定である。6点を出品。石にも花卉にも見えるモチーフを和紙にインクで端的に描いている。色彩は、入り口に飾られている作品が淡い。もっと孤独で殺伐としていても、温かさは伝わる。

小出恵理奈は1986年東京生まれ、2013年にステップスで個展、2度グループ展に参加、14点の小品を出品。木片にアクリルと油彩で着色しているが、工芸的な煌きが発生している。貝殻のような、地層のような時間の沈殿が感じられる。大きな作品ではどのように展開するのか楽しみだ。

瀧瀬令は1989年東京生まれ、既にステップスで2回の個展を開催し、2回のグループ展に参加している。7点の小品を出品。質の異なる絵画とコンセントに描いた作品は、瀧瀬の自由多様な姿を再確認できた。更に異なる絵画を奔放に描いて広く多く発表して欲しい。

佐々木敬介は1993年静岡生まれ、東京芸術大学大学院1年在籍、中型連作作品2点を出品。紙に写真転写したのは、題目にあるとおり「カーテン」なのだろうか。零れる光と掬う闇が曖昧であることに意義が生れる。作品のサイズが異なる点も工夫されている。連作を増やすといいだろう。



田崎亮平は1988年神奈川生まれ、ステップスで2013年に個展、二度のグループ展に参加。6点を出品。何処までが樹脂で、何処までがリボンか判別できないのが楽しい。六色の意味と形をもっと探究すれば、それぞれが時代と空間に対する「ギフト」と化すであろう。

中山竜輔は1994年東京生まれ、東京造形大学3年在籍。2015年にステップスで個展を開催した。今回、異なる2点を出品。アカデミックと人形という対照的な作品が対になっていないことに、中山のこれからの展開を予感させる。様々なタイプの既存の概念の破壊を期待する。

河明求は1983年韓国生まれ、韓国、イギリス、日本で学び、今日、日本で活動中。2014年にステップスで個展を開催。急須と茶碗のセットは独得の装飾が為されている。焼き物と木、金属によるオブジェは簡素な形と物質感の衝突が、壁掛けにかけられ絵画化する点が特質だ。

堀太一は1985年岐阜生まれ、2015年ステップスで個展を開催、今回は1点のみで勝負した。陶に金彩を施した作品は、海星にも太陽にも赤子にも見える。描かれた心臓、文字が装飾の域を超えれば、陶の形が強調されるであろう。今後、複数の作品が轟く姿も見てみたい。

DMでオーナーの吉岡は「出来上がっていない」というところが最大の難点であり、最大の魅力であると論じている。未完成は、それだけ可能性を多く秘めている証である。若手でも「出来上がった」作品を描く者は多くいる。年配でも、いつまでも出来上がらない者も存在するのだ。ステップスギャラリーは日本の現代美術の黄金時代である80年代前半に若手であり、その後活動場所を失ってしまっても制作を続ける中堅のアーティストが多く展示しているように感じて若手を着実に育てていることが、今回の展覧会で明確となる。ベテランも活躍するべきである。

